

Title	第3講：ギリシャの三哲(ソクラテス, プラトン)
Sub Title	
Author	石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.61- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学工学部大学院講義ノート
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第3講

ギリシャの三哲 (ソクラテス, プラトン)

「理系の西洋哲学史」 [目次; 他](#)

エジプトのピラミッド造営という国家プロジェクトで得られた高い技術力の影響下でタレス,..., ピタゴラス, パルメニデス等によって科学路線の哲学の原型が生みだされた。しかし, ギリシャでは全く違った路線の哲学が誕生し, ギリシャの三哲 ((ソクラテス), プラトン, アリストテレス) によって, つぎのような西洋哲学の原型が形成された:

{	(b ₁): 実在的世界記述法 (アリストテレス → ニュートン)
	言語的世界記述法
	{ (b ₂): 空想的言語的世界記述法: 西洋哲学の本流 (ソクラテス, プラトン, デカルト, カント)
{	(b ₃): 科学的言語的世界記述法 (パルメニデス → 統計学, 量子言語)

本節では, ギリシャの三哲 (ソクラテス, プラトン, アリストテレス) のなかでソクラテスとプラトンの仕事を説明する.

3.1 プロタゴラスとソクラテス (哲学が文系になった)

世界記述の哲学とは,

- (A) 世界を如何に記述するか? 世界を如何に理解するか?
世界を記述する言語は如何なるものか?

等を問題にする.

しかし、世界記述の哲学とは別の哲学（倫理哲学）もある。

倫理・道徳哲学 [人間, 如何に生きるか?]

理系の多くが（否, 文系さえも）, 倫理哲学は「口だけ（=弁論術）」と思っているかもしれない。事実, ソフィスト（古代ギリシャで弁論術や修辞法などを職業として教えた者）たちの中心的人物プロタゴラス（前 490 頃 - 前 420 頃）は, 「人間は万物の尺度である」と説き, 各人の主観的判断だけで, 客観的な真理というようなものは存在しないとすする相対主義を主張した。資本主義の常識は

主観的価値の平均 = 価格

だから, ソフィストの主張は合理的で, 現代の常識と言える。

しかし, これに真っ向から異論を唱えたのがソクラテス（BC.469 年頃 - BC.399 年）で,

(B) 人間, 如何に生きるべきか?

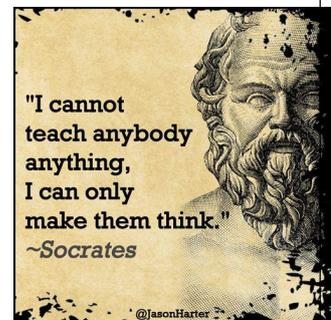
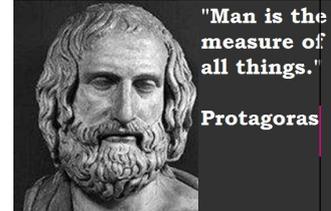
を問うて, このために,

(C) 善, 幸福, 徳, 正義, 勇気, 愛 . . .

等のことばの意味を明確にして, これらが哲学の主要テーマであることを示した。結局, ソクラテスは,

相対主義（合理的なソフィスト） vs. 絶対主義（信念の人ソクラテス）

の問題提起をしたことになる。



世界規模で考えるならば, ソクラテス（BC.469 - BC.399）, 墨子（BC.470 - BC.390）, 孔子（BC.551 - BC.479）, 釈迦（BC.565 - BC.486）は同時代の哲人で, 問題（B）を追究した。この意味では,

ソクラテスは平凡だった

といえる。これは, ギリシャ数学と対比すべきことで,

- 数学という本来世界共通（宇宙共通かもしれない）であるべきものが, ギリシャだけで異常に発達したという事実

は特筆すべきである。すなわち, 世界規模で考えるならば,

ピタゴラス, ユークリッド (後出) は特異だった

さて, 当然のことであるが,

(D) 上の (C) で述べたような言葉が普及しなかったら, 人類は滅亡していたかもしれない (すくなくとも, 「人間社会」を形成できなかった) と容易に想像できる

のだから, 倫理哲学の重要さはわかると思う。

さて,

倫理哲学は世界共通 (ホモ・サピエンス共通) である

と言うより, 世界共通でなければ困る。そうでなければ, 「世界平和」など実現しないからである。

❖ 補足 3.1. 数学・物理学は, 宇宙共通と信じていいだろう。しかし, 倫理哲学は宇宙共通ではなくてホモ・サピエンス共通である (であってほしい)。倫理哲学に真理とか普遍性があるわけではないだろう。蟻の社会には「蟻の倫理・道徳」があるに違いないし, 猿には「猿の倫理・道徳」があるに違いない。ネアンデルタール人の倫理哲学は我々とはかなり違っていたのだろう。だから, 我々の祖先はネアンデルタール人を滅ぼしたに違いない。文明の進んだ宇宙人と交信・接触をすることが将来的には起こるだろう。しかし, このときに, 宇宙人が友好的であることを無条件で期待することはあまりにも無防備すぎる。

本書全体を通して強調することであるが, 実は,

● 哲学の主要テーマは (世界記述でなくて) 倫理・道徳である

と考える。また, 現代的には, 「哲学」という言葉は, 「処世術 (「人間一般」ではなくて, 「ある特定の人々」に対する「如何に生きるか?」という問題・解決) の意味で使われることが圧倒的に多い。「人生哲学」, 「政治哲学」や「経営哲学」等である。これらもソフィストの守備範囲と思えば, ソフィストは多数派と言える。倫理哲学と政治哲学はかなり近い。儒教は科学試験の重要科目で統治術の役割もあったし, プラトンは哲人政治家を育成するためにアカデメイアを設立した。

♠ 注釈 3.1. ソクラテスは書いたものを残していない。「ソフィスト vs. ソクラテス」の物語は, ソクラテスの弟子のプラトンの創作物語なので, 公正とは言えない。たとえば, 無敵の論法「無知の知 (I know I know nothing)」は以下のようなものである。

- ソフィスト: ……何かを主張する……
- ソクラテス: 「それは違う」と否定する。
- ソフィストとソクラテス: ……暫し問答……雄弁に語るソフィストとソクラテス

- ソクラテス: どうやら君の無知が露になったようですね. 私は自分が無知であることを既に知っていて, 君は自分の無知を自覚していないので, この議論は私の勝ちだね.



という無敵の論法が「無知の知」である. プラトン著の「ソクラテスを主人公とする小説」を定説に囚われずに読めば,

- 詭弁を弄しているのは, ソフィストよりもむしろソクラテスの方と読めないこともないと思う. ソクラテスがドヤ顔で突然「I know I know nothing」と言い出したので, 唾然として言葉が出ずに黙ってしまったら, ソクラテスが「勝った!」と叫びながら小躍りして去って行ってしまった. というのがソフィストの感想だろう.

物理学ならば実験で決着をつければよいし, 数学ならば証明すればよい, 工学ならば役に立てばよい. しかし, 倫理哲学では, そういう形で決着できない. そこで,

- ソクラテス (すなわち, プラトン) が考えた決着の仕方が,
無知の知 (= 「I know I know nothing」 = 「私は『私が何も知らない』ことを知っている

という自己言及的命題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的命題))」というマジックワードだった

のだと思う. つまり,

(E) 相手の頭を混乱させるようなパラドックスみたいなことを言って, 議論を終結させる

である. 悪く言えば, 「心理的な騙しのテクニック」であるが, そんなことにいちやもんつけるを読者はいないだろう. 水戸黄門の印籠の役割をするものがないと物語は終わらないのだから.

「哲学とは?」などには答えようもないが,

- 自己言及的命題の言葉遊び (「無知の知」とか「禅問答」等) が世界記述の哲学のかなりの部分を占めていて, それが哲学の科学的不毛の一つの要因になっている

ことは, 本書を通して議論する.

- ♣ 補足 3.2. ハーバード白熱教室のサンデル教授の「正義の話をしよう」がハーバード大学で最も人気のある講義として, NHK で放送されて話題になったことがある. 「トロッコ問題」が取り上げられ

ていた。すなわち、

- 「暴走する路面電車の前方に5人の作業員がいる。このまいくと電車は5人をひき殺してしまう。一方、電車の進路を変えて退避線に入れば、その先にいる1人の人間をひき殺すだけで済む。どうすべきか？」……つまり「5人を救うために1人を犠牲にすることは許されるのか？」という問題である。サンデル教授の巧みな話術で学生たちの心を引き付けなのであるが、結局、解答・結論を言わない講義だった。著者は「結論を言わない講義」をしたことが無かったので、「こういう講義もあるんだ」と妙に感心してしまった。さすがに、ハーバード大学というべきだろうか？
-

3.2 プラトン； イデア論

3.2.1 イデア論 – 断言された虚構 –

倫理哲学の対立構造：

(A) 相対主義（ソフィスト） vs. 絶対主義（ソクラテス）

の演出の中で、ソクラテスを援護するために弟子のプラトン (BC.427 頃 - BC.347 頃) は、「イデア論」を打ち上げて、絶対主義の基盤を確立した。

もちろん、「愛は勝つ」とか、「人の命は地球より重い」とかが客観的真理であると言っていたのでは、保険会社の生業が成り立たない。しかし、「そう信じたい」とソクラテスは思った。そして、その理由づけのために、弟子のプラトンは「イデア界」というオカルト的天上世界を持ち出した。そして、これが「世界記述の哲学」につながった。すなわち、イデア論とは、

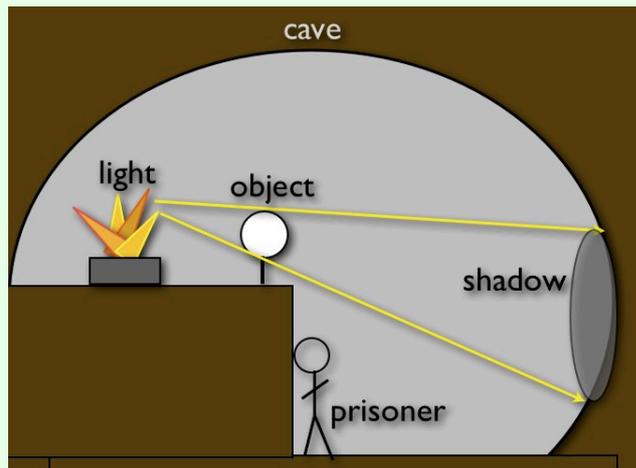
(B) 「倫理哲学 (人間, 如何に生きるか?)」の理由づけを「世界記述の哲学 (如何に世界を記述するか?)」に求める無謀な試み

であり、これが、以後二千数百年続く「哲学の語り方」のスタンダードになる。

(C): アイデア論というおとぎ話

アイデア論とは

- 現実の世界では、「愛はお金に勝つ」をいつも信じてもよいとは言えない。しかし、別の世界（理想の世界、アイデア界）が天上にあって、そこでは「愛はお金に勝つ」が客観的真理であると信じられている。つまり、アイデア（=真の姿）が天上に存在し、アイデアこそが本質的存在であり、地上に存在する形あるものはその影絵に過ぎない。



というのがアイデア論。

したがって、地上界 (=現実界) は、影絵なのでたまには

- (D₁) 愛がお金に負けること
- (D₂) 正義だけでは生きていけないこと
- (D₃) 善人が不幸になること

もある。しかし、プラトンは

**アイデア界では、愛は勝つが客観的真理である。
だから、愛を信じなさい**

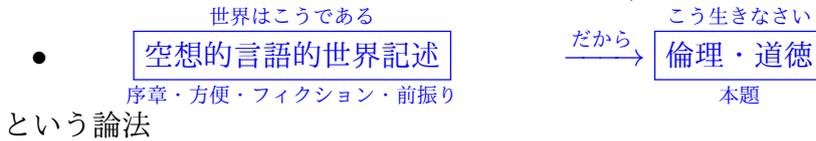
と強引に主張する。

この理由付けを信じるかどうかは別として、このアイデア、すなわち、キーワード「アイデア界」の発見こそ「二元論的観念論」の嚆矢であり、その後の紆余曲折はあるものの常に西洋哲学の本流であり続けた。倫理哲学（ソクラテス）の援護射撃であったはずの「アイデア論という世界記述

の論法」が世界記述の哲学の本流になる。

我々人間の DNA は、

(E) 「倫理・人生哲学」を「世界記述の哲学」で装うという論法。つまり、「世界がこうなっているから、我々はこう生きるべき」という論法 (=空想的言語的世界記述), すなわち、

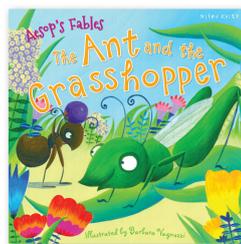
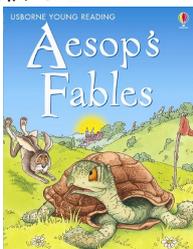


を本能的に好む。「如何に生きるべきか？」という根拠を客観的に保証しようという無謀な試みなのだから、この論法には無理があることは当然である。しかし、人間の脳は、「理屈だけで動く」わけではない。

- 論理だけでは無力で、**感覚的な共通土壌があってこそそのロジック** である。

♣ **補足 3.3.** 「感覚的な共通土壌があってこそそのロジック」とは「ある世界記述の下でのロジック」と似たような意味で、このフレーズは重要である。この「ロジック」は一般人が通常使うロジックで、広い意味では、裁判のロジックとか政治のロジックとか家庭内のロジックとか保険の勧誘におけるロジックとか競馬のロジック等である。様々なロジックなかの一つとして、「数理論理学・数学基礎論のロジック」があるわけであるが、このロジックは(宇宙人でも知っているかもしれないぐらい) 普遍性がある。しかし、「数理論理学のロジック」が他のロジックたちに比べて偉いわけではない。以前、文学部哲学科の学生が「超準解析(とか様相論理)」の質問に来たことがあった。もちろん真面目に答えておいたが、「一部の数学者の趣味程度のものになぜ興味をもっているの？」とはさすがに聞けなかった。将来ある学生が無駄な時間を費やしていると思ったわけだが、今から思えば、失礼だったとしてもそう聞くべきであった。それにしても、哲学や経済学専攻の一部の学生の抽象数学への思い入れの強さは異常すぎる。数学用語を多少なりとも知っているということが、その分野の優秀さを示す尺度になどなるわけがない。当然のことであるが、経済学がよくわかっているとは、「経済学という共通土壌のロジック」が使いこなせるということで、「数学のロジック」が使いこなせることではない。

♠ **注釈 3.2.**



イソップ(前 620 頃 - 560 頃)： トラキアあるいは小アジア生まれといわれるギリシアの寓話

作家. 元々は奴隷だったが, のちに解放された. その寓話は前5世紀末にはすでに有名だった. 当然, プラトンもイソップ物語の威力を知っていたはずである. そして, プラトンは強引に「寓話こそが真の姿である」と断言したと思えばよい.

プラトンの言い分はこうだろう: 「**相対主義 (ソフィスト) vs. 絶対主義 (ソクラテス)**」などいくら問答しても結論が出るわけでない. 一つの規範 (= 世界観) を提示して, その下で, 議論しなければ埒が開かない. 人々が求めているのは真実などではない, というよりも真実なんか無いかもしれない. **「断言された虚構」**なのだ. そしてこれこそ「哲学」なのだ.

- 「嘘でもいいから, 『愛している』と言って」とか「正義の味方のスーパーマンがいる」とかである.

◆ **注釈 3.3.** ソクラテスは問答でソフィストたちと議論して, 相手が疲れた頃を見計らって, 「無知の知」というマジックワードで議論を勝利するという形をとったが, プラトンは, **イデア論という虚構を断言する**という説得の形を発見した. また, 試験監督無しのテストを小学生に行ったときに, カンニング防止として, 「透明人間が見ているから, ……」と言うことの効果が絶大であることは, 多くの心理実験で確認されている. 小学生が透明人間の存在を信じているわけではないにも拘わらずである.

念の為に言うと,

(F) プラトンは「イデア界の存在」など信じたわけではないし, イデア論が詭弁であることも十分に承知していたに違いない. そもそも倫理哲学に真理など無いとわかっていた. それでもイデア論の効果はあった.

のだと思う. しかし, そうだとしても,

(G) 人間の DNA の配列の中に人間共通の倫理観というようなものがプリントされていると主張できないわけではない. しかし, これは科学の方向であって, 哲学の方向ではない.

3.3 プラトン：空想的言語的世界記述

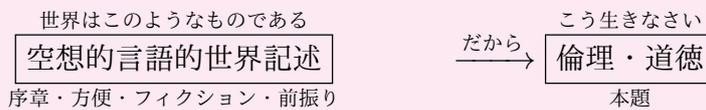
3.3.1 世界記述, 観念論, 二元論の必然性

さて、プラトン流の哲学の物言い・語り方 (=空想的言語的世界記述) を、以下に再確認しておこう (cf. 1.3.4 節)

(A): 空想的言語的世界記述法 (西洋哲学の本流)

さて、空想的言語的世界記述法 (=プラトン流の哲学の語り方) は

(A) 世界はこうなっている。だから、我々はこう生きるべきである。すなわち、



となる。当然、

(A₁) 【世界はこのようなものである】は二の次 (方便) で、

(A₂) 【こう生きるべき】がメインの主張

となる。

高校での科目名が、(「世界記述」とか「哲学」とかではなくて)「倫理」となっているのは極めて妥当で、分かっている人は分かっているということかもしれない。

プラトンにとって、

世界記述の部分の「イデア論」はたとえ話・前振り

に過ぎない。

たとえば、仕事関係で社会人同士が会ったときに、突然仕事の話などしない。普通は、前振りですらで天気の話ぐらいをするだろう。彼女にプロポーズするときだって、突然「結婚してください」は無いらしい。落語では、マクラ (=前振り) の入り方で「名人かどうか」がわかるらしい。

このことは、二元論的観念論の系譜：

(B) プラトン (イデア論) → アウグスティヌス → トマス・アクィナス → デカルト → カント (認識論)

においてすべて同様なことが言える。そうならば、

- 彼らの提案した世界記述の哲学は真剣に議論するに値するか？

という振り出しから考え直すべきことだろう。本書で繰り返し述べることであるが、著者は

- 二元論的観念論の系譜 (B) 内のいずれの世界記述法も (イデア論と同程度の) おとぎ話であって、真理とは一切関係しない「真理もどき」である。成功した (おとぎ話の域を脱した) 二元論は量子言語だけである。

と考えている。そして、

- 量子言語から逆算して、真理とは関係ない「(B) ; 二元論的観念論の系譜」を見渡してみると、不思議なことに、「量子言語にだんだん近づいてきた」という奇跡を見ることができる

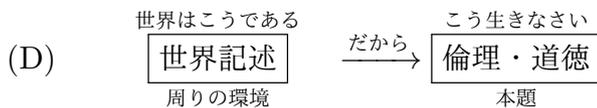
というのが本書のストーリーである。「(B) ; 二元論的観念論の系譜」はその場の思い付きで発せられたおとぎ話にの系列にすぎないにもかかわらずである。

3.3.1.1 世界記述の必要性

イデア論がおとぎ話であるとしても、プラトンの考えにも一理ある。

(C) 倫理・道徳と言っても、周りの環境 (=世界) に依存する

からである。戦国時代の倫理・道徳と現代の倫理・道徳では違って当然だろう。老若男女でも違うだろう。この意味では、



は厳密には正しい。また、唐突に「倫理・道徳」を説くと、説教臭くなるわけで、占い師だって、身の回りのことを聞いてから、アドバイスをする。

3.3.1.2 観念論 (形而上学的, 非現実的) の必要性

しかし、厳密に (D) を実行したのでは、人生相談であって、学問らしくなくなってしまう。つまり、世界記述は個別的・具体的では融通が効かなくなってしまう。

- 親身の人生相談ならば、近所の詮索好き・世話好きのおばさんに哲学者は太刀打ちできない。
- 本当に憔悴しているのならば、精神科医に通って薬を処方してもらえばよい。

一般大衆が欲しているのは、「他人が悩みを人生相談をして、識者がそれに答える」という形式ののぞき見的な文学である。個々の人生相談でない。一般論としての「人間、如何に生きるべきか？」なのだから、古今東西普遍的な「世界記述」を考えたいとプラトンは思った。この思いが「観念論」の誕生につながった。

具体的な世界では間違いを指摘されるかもしれないが、実験で白黒つけることができない世界(=形而上学的世界, 非現実的世界)ならばその心配がない。すなわち、

(E)「観念論的世界」(i.e., 「寓話的な世界」, 「フィクション的世界」)が好ましい。(現実重視の写実画的記述より)感性重視の抽象画的記述が好ましい。

とプラトンは考えたに違いない。

3.3.1.3 二元論の必要性

そうだとしても、次は注意しておく必要がある。

(F) プラトン流の哲学の語り方の「^{だから}→」は注目すべきで、「だから」と理由づけをするからには、世界が我々と全く無関係な一元論(=「物」だけの世界)では自然な理由づけができないわけで、何らかの意味で人間が反映されている世界(「物」と「人間に関する何か」との二元論)でなければならない。

たとえば、

- 一元論のニュートン力学から人生訓を得るようなことは普通はしない

である。

上記の理由で、

(G) 「世界記述の哲学は二元論的観念論」がスタンダードとなった

と考える。

♠ 注釈 3.4. 上の議論で、二つの言葉「二元論」と「観念論」はかなり気分的な使い方をしていることに注意せよ。本書を通して、明らかにすることであるが、

- 二元論的観念論の系譜：

プラトン → アウグスティヌス → トマス・アキナス → デカルト → カント
 は、二つの言葉「二元論」と「観念論」の意味を明確にする歴史だったことがわかるだろう。したがって、「二元論」と「観念論」の明確な意味は最後の最後に登場する量子言語によって初めてわかる。

そうだとすると、本書のテーマは、「一元論 vs. 二元論」で、次表のようになる。

表 1.1 : 最大の哲学・科学論争 [実在的世界記述 vs. 言語的世界記述](主張 1.5)

論争 \ [実] vs. [言]	実在的世界記述 (一元論・实在論)	言語的世界記述 (二元論・観念論)
㉑: 運動	ヘラクレイトス	パルメニデス
㉒: 古代ギリシャ	アリストテレス	プラトン
㉓: 普遍論争	唯名論 (オッカム)	実念論 (アンセルムス)
㉔: 時空	ニュートン	ライプニッツ
㉕: 量子力学	アインシュタイン	ボーア

㉑は著者のフィクション, ㉓は論争というより混迷. ㉔はライプニッツ=クラークの往復書簡 (cf. 9.4 節), ㉕はボーア=アインシュタイン論争. 量子言語はボーア=アインシュタイン論争を解決するために提唱された (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第四講)*¹

3.4 二元論のキーワード

3.4.1 二元論 (=物心二元論) のキーワードは三つ

二元論のキーワードは簡単である。なぜならば、

- 二元論なのだから、二つの何か (たとえば, [A](心) と [C](物)) が無ければならない。しかし、それらが全くの無関係では、「一元論が二つある」だけで、二元論にはならない。その二つ (たとえば, [A](心) と [C](物)) を仲立ちするもの [B] がなければならない。

そうならば、

- 物心二元論の構造は、

$$[A](\text{心}) \longleftarrow [B] \longrightarrow [C](\text{物})$$

(仲立ちするもの)

となつて、キーワードは三つ [A](心), [B](仲介するもの), [C](物) だけになる。

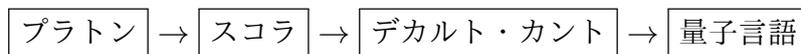
歴史的には、三つ [A](心), [B](仲介するもの), [C](物) が揃っていない不完全な二元論もある。しかし、

- 二元論のキモは [B](仲介するもの) である (cf. 1.1.2 節の言語的コペンハーゲン解釈 (E₃)). したがって、[B](仲介するもの) があれば二元論と呼ぶ

ことにする。

3.4.2 【アイデア】 = 【メートル原器】

西洋哲学は次のように繋がっている：



もちろん、「繋がっている」の意味が重要で、この意味は以下の表の意味であると考える。

主張 3.1. (=主張 1.6) [キーワードの対応]

[言語的世界記述のキーワード]

言語的世界記述法は物心二元論で、2つのキーワード [A](= 心) と [C](= 物) とそれらを媒介する [B] から成り立つ。

物心二元論	[A](= 心)	[B](A と C を媒介)	[C](= 物)
プラトン	現実界	イデア	/ [I]
トマス・アクィナス	後の普遍	前の普遍	/ [内の普遍]
デカルト	我, 心, 脳	身体	/ [物]
ロック	心	第二性質	第一性質 [I]
パークリー	心	第二性質	/ [神]
カント	現象	知覚	/ [物自体]
統計学	サンプル確率空間	/	パラメータ [母集団]
量子言語	測定値	観測量 (=測定器)	状態 [システム]

完成形は量子言語のキーワード「[A]:測定値, [B]:観測量, [C]: 状態」で, これらの言葉の使い方は, 1.1.1 節の言語ルール 1, すなわち,

- 測定者が, ω という状態をもつシステム (=測定対象=物) に対して, 観測量 O を (または, 測定器 O で) 測定したとき, 測定値 x を得る確率は $P_{\omega}^O(x)$ である.

に従えばよい (また, デカルト図式 1.1 を参照せよ). 量子言語は完全にわかっているのだから, 他の哲学は上の表を見習えばよい.

////

主張 3.2. [=主張 1.7: 哲学の進歩]

プラトン以来, 二元論的観念論のキーワードは徐々に明確化され最終的には量子言語のキーワードに収束していると考えられる. たとえば, 「イデア」では意味不明であるが, 「第二性質」ならばすこしわかったような気分になる. 最終的に量子言語の「観測量 (=測定器)」で完全にわかる. したがって,

- [進歩] を「量子言語に近づくこと」と定めるならば,

次が言える.



今のところは、プラトンだけを見ればよい。 デカルト以降は順次説明する。

////

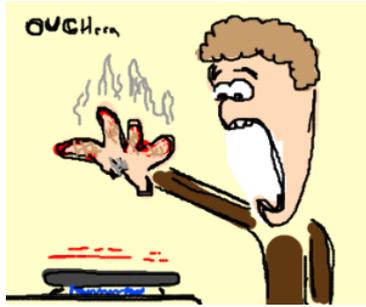
- ♠ 注釈 3.5. (=注釈 1.5) (i): 上で, [A],[B],[C] の中で, 物心二元論のキモは媒介するもの [B] である. プラトンにおいては [C](物) が欠如しているが, 重要なのは [B](媒介するもの) なので (cf. 1.1.2 節の言語的コペンハーゲン解釈 (E₃)), プラトン哲学は二元論である. 統計学には [B] がない. 一般には, 統計学は数学の一分野とされていて, したがって, 二元論とされていない. しかし, 本書では, 統計学を「不完全な二元論」として上の表に書き込んだ.
- (ii): プラトンにおいて「現実界 ≈ 心 (人間)」を不可解と思うかもしれない, しかし, 「現実界では, 『人間は万物の尺度』」なのだから, 納得してもらいたい. 量子言語における「測定値 ≈ 心 (人間)」も同様で, 人間が測定をして, 得られるのが「測定値」である. つまり, 人間無くして測定値無しである.
- (iii): 量子言語の [C] の「状態」と「システム」の使い方は, 「システムの状態」のようにいつもペアで使うので, 一つみたいなものである. したがって, [C] が二段で書かれているが, 一つみたいなもので, あまり気にすることはない.

この表 (主張 3.1) の意味は本書全体を通して説明することであって, 今は,



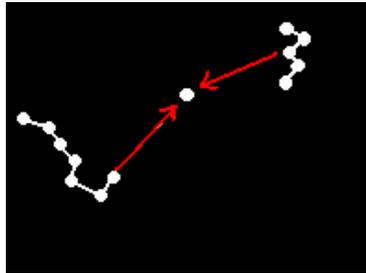
だけに注目すればよい. ここで「 \longrightarrow 」の意味は, 次を見れば納得してもらえらるだろう.
明確化

- アイデア
「美のアイデア, 善のアイデア, . . .」がある. すなわち, 「絶対的な美, 絶対的な善, . . .」がある. つまり, 「美のメートル原器, 善のメートル原器, . . .」がある.
- 第二次性質 (「物固有の性質 (第一次性質)」の感じ方)
「甘い, 辛い」, 「熱い, 冷たい」, 「美しい, 汚い」, . . .



- 観測量 (=測定器)

電流計, 体重計, 方位磁石, 糖度計, 温度計, 方位磁石としての北極星 . . .



3.5 プラトンのアカデメイア；幾何学を知らぬ者、くぐるべからず

3.5.1 哲学は理系脳にはわからない：「論理的」の意味

さて、次の意味不明な定説から始めよう。

(A) プラトンは、感覚によっては「あいまいな知」しか得ることができず、「正しい知」は理性でしか捉えることができないと考えた。数学は感覚ではなく理性で答えを出すので、プラトンは数学を非常に重視する。プラトンが設立した学園（アカデメイア）の入り口の門には

「幾何学を知らぬ者、くぐるべからず (Let no one ignorant of geometry enter!)」

と書かれていた ([ギリシャ数学=幾何学] に注意せよ)

である。

これを真っ正直に信じるのはどうかと思う。著者は、数学系の学科に属していたが、そこで論理の重要性をわざわざ喚起するような教育を受けたこともないし、した覚えもない。論理の重要性が強調されるのは、むしろ、論理的かつ定量的な議論がしづらい分野なのだと思う。アカデメイアは哲人政治家養成学校だったわけで法学部みたいなものなのだから、「幾何学を知らぬ者、くぐるべからず」は、法学部や経済学部の入学試験の科目に数学があるようなものなのかもしれない。ギリシャにとって代ったローマは政治的には非常に成功した帝国であるが、ギリシャ数学に比べてローマの数学はほとんど見るべきものがない。また、著者は優秀な数学の専門家を多数知っているが、彼らの数学の論理力が他分野や日常生活に有効に使われている例をまったく知らない。数学をやらなくても元々論理力が優れていたんだらうと思わす人は幾人かいるが、数学をやりすぎて変人になってしまった例もいくつか知っている。

つまり、プラトンの興味は、論理的かつ定量的な議論がしづらい分野である。事実、「無知の知」や「イデア論」は「心理的な論理テクニク」であって「数学的・論理的」ではない。そもそも、プラトンの数学力も不明だと思う。

(B) 「論理的・数学的・科学的」を看板に掲げ繰り返し強調して、相手を信じ込ませる「非論理的な方法」は、プラトン以来現在まで最も有効な説得方法の一つである。

事実、カントの「純粋理性批判」は理性的でないし、ウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」も論理的ではない。もちろん、著者は、プラトンやウィトゲンシュタインに否定的ではない。プラトン以来、数学を必須とする哲学など一つもない。「論理的な哲学」など無いし、もしあったとしたら碌でもない哲学だと思うからである。「論理的な文学」とか「非論理的な数学」とか「何

でも溶かす液体の入った容器」のような意味不明なフレーズの一種と思う。

♣ 補足 3.4. (i): 上記の著者の意見を論破するには次を言えばよい:

- 石川さん. あなたは数学とまったくかわりのない人たちとの付き合いがありませんね. そういう人たちの論理的思考能力の平均を知らないのですよ. 信じてもらえないかもしれませんが, 「怒られないと勉強しない」の対偶が「勉強すると怒られる」と思っている人だっているんですよ*2.

石川さん. あなたの付き合っている人たちは数学をやり過ぎているのですよ. 「過ぎたるは及ばざる如し」で, 変になる人もいますよ.

である. こう言われると, 黙らざるを得ない. しかし, 著者は「教養を高めると人格者になる」, 「スポーツをやると礼儀正しくなる」も信じていない.

(ii): 論理的っぽい言葉遊びが哲学の要素の一つであることは否定できない. たとえば, 次のフレーズなど結構哲学っぽい.

- 「スッピンメイク」, 「張り紙禁止の張り紙」, 「アラフォー女子」, 「選択しない選択」, 「『我思う, 故に我あり』と思う」, 「神は万能だから, 存在したり, 存在しなかったりできる」等である.

「看板に偽りあり」と言われようが, 「数学・論理・理性・客観的・科学的」を哲学の看板から外すわけにはいかない. 「数学・論理・理性・客観的・科学的」を強調しないと, 宗教との差異が見えなくなってしまうからである. そして, この看板の足かせのお陰で, 哲学は純宗教にならずに済んだ. 宗教のように誰でも welcome としなかったお陰で, 幾分知的な雰囲気を保つことができた.

結果的には, 「嘘でも, 【論理的・数学的】と言った」効果があった. このように, 二転三転して, 恋の駆け引きのような (または, マルチ商法の勧誘のような) 心理的なテクニックが駆使されているのが哲学で,

- 「I know that I know nothing」と言ったぐらいで評価されるのが哲学なのだから, 単細胞の理系脳には哲学はわからない

と思う.

理系のために補足しておく. 文学にはいろいろなジャンルがある. たとえば, 恋愛小説, 推理小説, SF (サイエンス フィクション), 詩, 俳句, ノンフィクション等である. これと似た意味で, 世界記述の哲学も文学の一種である. すなわち,

*2 もちろん冗談で, 数学系の大学院生にとっても難問かも. しかも, こんなのが出来ても出来なくても数学の実力とはあまり関係がない. 「必要条件」と「十分条件」がわからない大学院生もいるが, これも数学の実力とはあまり関係がない.

(C) 世界記述の哲学とは、



において、[倫理・道徳] が先にある、このとき後付けの理由として、[世界記述] というタイトルの作文

である。

すこし極端な説明かもしれないが、こう思った方がよい。すくなくとも、「世界記述の哲学=世界の真理の探究」などと思ってはならない。哲学が真理について発言したことなど、一度もないと考える。たいていの大学では哲学科は文学部に属しているわけで、文学に真理・論理などないのだから、「わかっている人はわかっている」のだと思う。

理系にはわかりにくいことであるが、『論理』とか『科学』の意味は分野によってかなり異なる。要するに、

(D₁) 「哲学における『論理』」の意味は、「推理小説における『論理』」と同じ程度



(D₂) 「哲学における『科学』」の意味は、「SF(サイエンスフィクション)における『科学』」と同じ程度

と思えばよい。もちろん、否定的なニュアンスで言っているのではない。数学(とか数理論理学)のようなガチガチの論理になびいたのでは、禄でもない哲学しかできない。ガチガチの論理が好きならば、文学部(哲学科)などに行かずに、数学(とか数理論理学)をやればよい。

3.6 まとめ： プラトン流の哲学の語り方

3.6.1 まとめ

(A): プラトン流の哲学の語り方 (空想的言語的世界記述)

プラトンを源流とする哲学における世界記述とは、「空想的言語的世界記述」である。すなわち、

(A₁) 倫理的主張の前提としての「世界記述」である。

つまり、プラトン流の哲学の語り方、すなわち、

(A₂)

世界はこうである	→	こう生きなさい
空想的言語的世界記述	だから	倫理・道徳
序章・方便・フィクション・前振り		本題

という図式において、[倫理・道徳] の前提・援護射撃として、[(物語的言語的) 世界記述] というタイトルの作文が世界記述の哲学

である。

文学にはいろいろなジャンルがある。たとえば、恋愛小説、推理小説、SF(サイエンス フィクション)、詩、俳句、ノンフィクション等である。これと似た意味で、世界記述の哲学も文学の一種である。

(注)

(A₃) 「だから」という以上、世界記述の部分は、実際は「非論理的」であったとしても論理的を装って語らなければならない。読者に「非論理的」であることを疑われてはならない。もし疑われても白を切らなければならない。

世界でも類を見ない「ギリシャ数学(初等幾何)」を作った論理志向のギリシャ人にとっては、この(A₃)は難なく受け入れられたのだろう。

ホワイトヘッド(1861 - 1947)が

(B) 西洋の全ての哲学はプラトン哲学への脚注に過ぎない

で、言わんとした意図は知らないが、著者の理解は次のようになる。

(C) メインの倫理・道徳の部分は、東洋のように、仏教、儒教、道教などのいろいろな流儀が乱

立して、それらが微妙な緊張関係で 2500 年続いてもよかった。教義自体の発展・進化はほとんどないかもしれないが、それらの勢力には栄枯盛衰というか浮き沈みが生ずるだろう。しかし、西洋ではキリスト教が強かったので異なる歴史を歩んだ。メインの倫理・道德の部分はソクラテスやキリスト教に負うこと大なわけで、本題である倫理・道德のヴァリエーションなどほとんどない。すなわち、「ソクラテス + キリスト教」で十分である。しかし、プラトンの「哲学の語り方」に従うならば、序論の世界記述の部分を変えれば新しい哲学のように装って、新鮮さを保つことができる。すなわち、東洋では実現しなかった「進化・発展」が西洋では次のように西洋哲学の本流（プラトン流の哲学の語り方）として実現された。

- プラトン → アウグスティヌス → トマス・アクィナス → デカルト → ロック → ... → カント

たとえば言うならば、

車のモデルチェンジ

のような効果があったと思えばよい。2500 年の間には、方便（手段）を目的と勘違いした哲学者が幾人かはいたかもしれない。しかし、大きな流れとしてはいつもプラトン流の哲学の語り方が本流で、モデルチェンジという仕掛けが西洋哲学の隆盛をもたらしたと言える。

こう考えないと、全く役に立たない「世界記述の哲学（=おとぎ話、空想物語）」が 2500 年間も続いた理由を説明できない。

主張 3.3. (=主張 1.7=主張 3.2) そうだとしても、本書の主張は

そのモデル・チェンジが進歩でもあった

という **奇跡** である。すなわち、

- [進歩] を「量子言語に近づくこと」と定めるならば、

次が言える。



要するに、次の西洋哲学の奇跡が実現した：

(D) その場の思い付きの「二元論・観念論のモデルチェンジ」でも、天才たちの思い付きなので、結果的には、二元論・観念論の意味の明確化になっていた

つまり、

(E₁) メチャクチャにバットを振っても、天才ならばホームランになる

ということなのか、または

(E₂) 「メチャクチャにバットを振った」としか、凡人には見えない

ということなのだろう。

今のところは、プラトンだけを見ればよい。

- プラトンでは二元論・観念論は萌芽にすぎない。

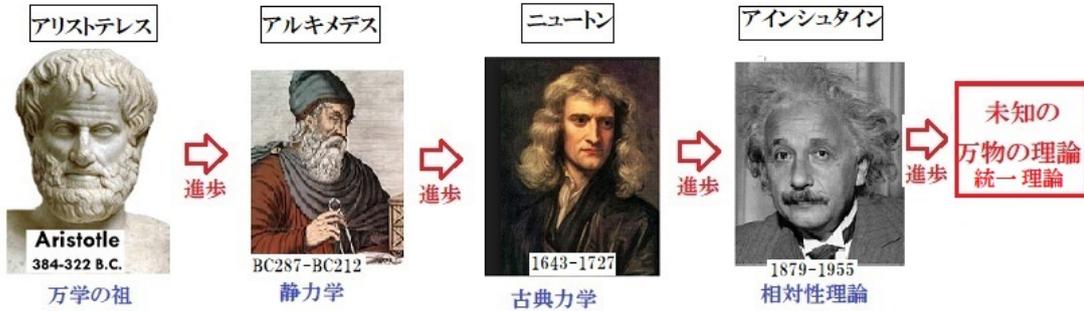
と結論して、二元論・観念論についての詳細はデカルト・カントの章で述べる。したがって、いまのところ、プラトン [哲学の形式] を得た。

////

♠ 注釈 3.6. [もう一つの奇跡]: さて、

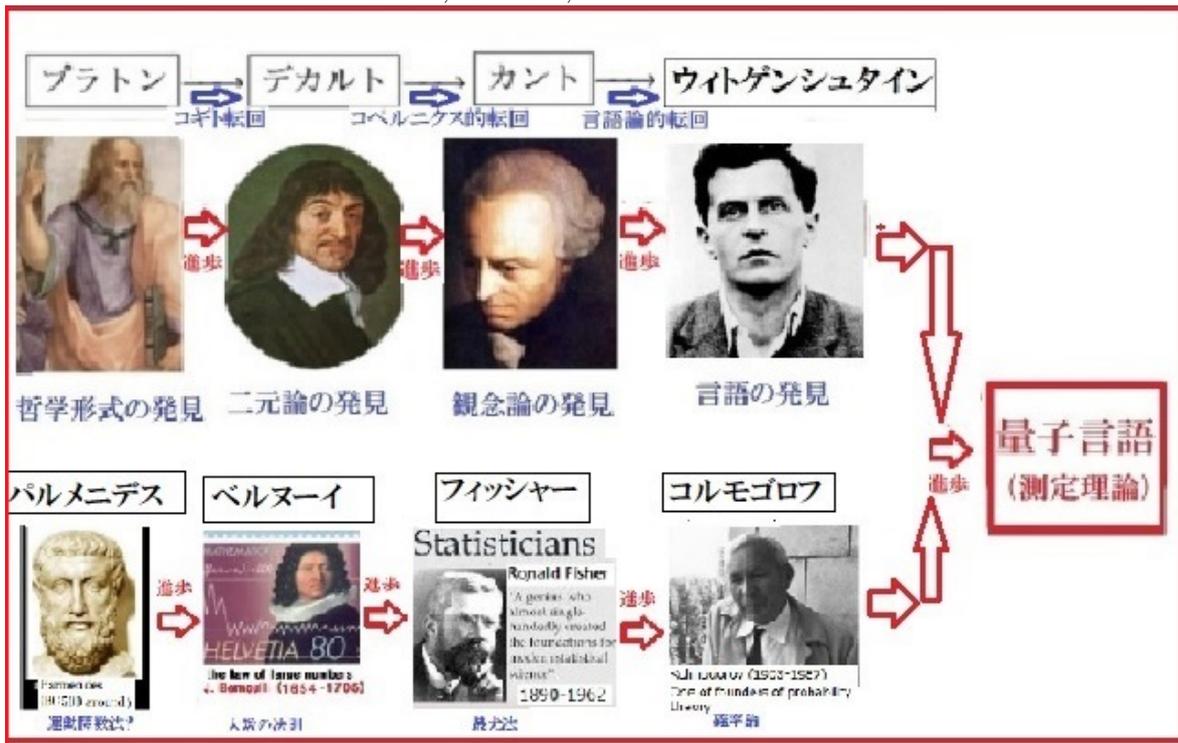
- 倫理哲学はすべてに人間に共通で世界標準 (人間標準) であると思う、と言うか、そう思いたい。そうでなければ、「世界平和」などと言う言葉が死語になってしまう。しかし、注意すべきは、西洋哲学の本流 (プラトン流の哲学の語り方=空想的言語的世界記述) は、世界規模で見れば地方の哲学の一つのすぎないということである。西洋という環境のなかで、独特の進化を遂げた「ガラパゴス哲学」と言ってもよいだろう。上で述べたように「車のモデルチェンジ」なのだから世界標準とは言えない。しかし、次の二つは、「科学の関する哲学」で世界標準である。

- 実在的世界記述 (宇宙共通と言った方が正確)
アリストテレス → アルキメデス → ニュートン → …



- 科学的言語的世界記述 (人間の言語能力に依存するので, 人間共通): これは実在的世界記述のように天才の独壇場というわけでないで, すっきりしていないが, たとえば,
パルメニデス・ゼノン (運動関数法) → 二千年間のトンネル → ベルヌーイ (大数の法則) → … → フィッシャー (統計学) → … → コルモゴロフ (確率論)

ここで, **[もう一つの奇跡]** が起こる. 実は, 科学的言語的世界記述も「二元論・観念論の明確化」を目指していたのである. そうならば, 必然的に,



となる.

♠ 注釈 3.7. 本節の「プラトン」を総括して, 今のところ次の分類を得る (cf. 主張 1.4[哲学者の仕分け]):

- (b₁): 実在的世界記述 (物理学)
アリストテレス, アルキメデス, ガリレオ,
ニュートン, アインシュタイン, . . .
- (b₂): 空想的言語的世界記述 (西洋哲学の本流)
プラトン, スコラ哲学, デカルト, ロック,
ライプニッツ, バークリー, ヒューム, カント,
フッサール
- (b₃): 科学的言語的世界記述 (統計学・量子言語)
パルメニデス, ゼノン, ベルヌーイ,
統計学, 量子言語

ピタゴラスの精神を受け継いで、パルメニデス、ゼノン等が科学としての (科学的) 言語的世界記述の確立 (運動関数法) を真摯に議論してきたのに、プラトンが空想的言語的世界記述をソクラテス (倫理哲学) の援護の方便として使ってしまった、世界記述を非科学的に矮小化してしまったと言えなくもない。しかし、ホワイトヘッドに「プラトンの脚注」と言われようとも、方便としての空想的言語的世界記述法は

(#1) プラトン → アウグスティヌス → トマス・アキナス → デカルト → ロック → ... → カント

として、2000 年以上の長きに渡って支持され続けてきたという歴史がある。また、科学としての言語的世界記述の確立は、キリスト教徒の後ろ盾がなくて、統計学の発見を待たねばならなかった。すなわち、

(#2) パルメニデス・ゼノン → 科学的言語的世界記述法の暗黒時代
約 2000 年間のトンネル
ベルヌーイ、ベイズ、ラプラス等はいたが

→ フィッシャー (統計学) → 量子言語
である。

(#1) と (#2) は共に「二元論・観念論の明確化」を目指していたとするならば、

当然というか奇跡というか

次は必然である。

すなわち、



である。